

全般 暖候期予報 (3月から8月までの天候見通し)

平成22年2月25日
気象庁 地球環境・海洋部発表

<予想される夏(6月から8月)の天候>

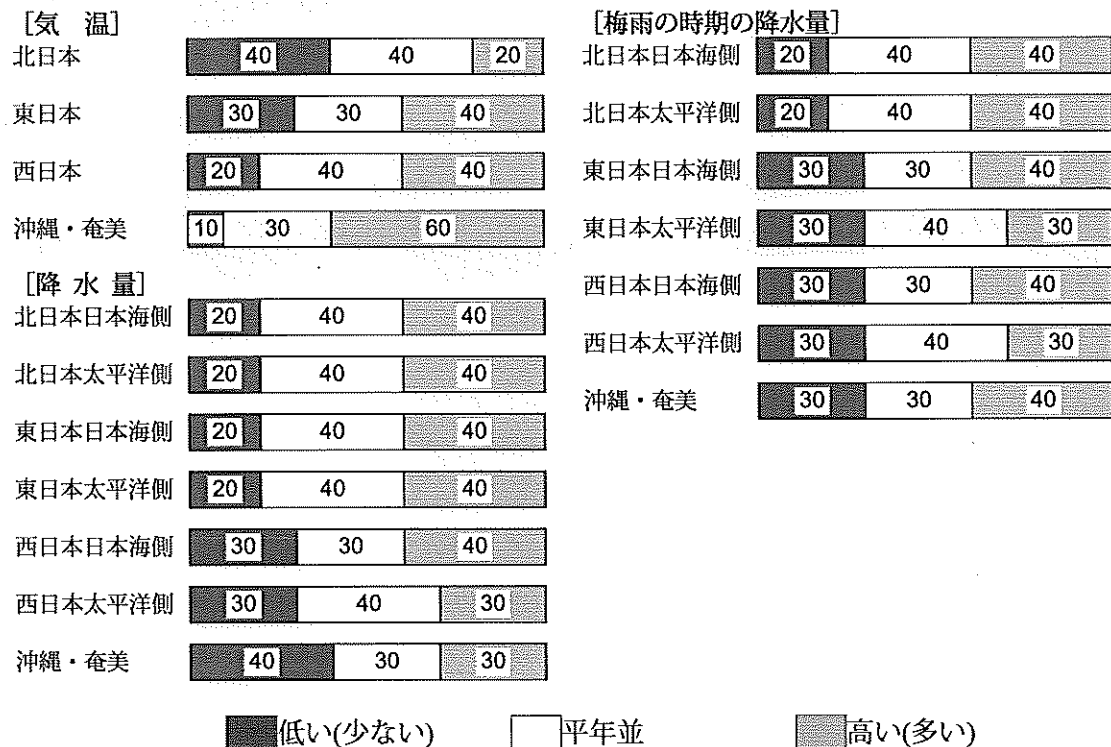
夏(6～8月)の出現の可能性が最も大きい天候と特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

6月から7月(沖縄・奄美では5月から6月)は北日本と沖縄・奄美では平年に比べて曇りや雨の日が多いでしょう。東日本と西日本では平年と同様に曇りや雨の日が多い見込みです。その後は北日本と東日本では平年に比べて曇りや雨の日が多いでしょう。西日本と沖縄・奄美では平年と同様に晴れの日が多い見込みです。

この期間の平均気温は北日本で平年並または低い確率ともに40%、西日本で平年並または高い確率ともに40%、沖縄・奄美で高い確率60%です。夏の降水量は北日本と東日本で平年並または多い確率ともに40%です。梅雨期間の降水量は、北日本で平年並または多い確率ともに40%です。

なお、5月までの予報については、最新の3か月予報等をご覧ください。

<夏(6月から8月)の気温、降水量および梅雨の時期(6月から7月、沖縄・奄美は5月から6月)の降水量の各階級の確率(%)>



<次回発表予定等>

1か月予報：毎週金曜日 14時30分 次回は2月26日
3か月予報：3月25日(木) 14時

暖候期予報については、3月25日と4月22日発表の3か月予報に合わせて予報内容を再検討し、変更がある場合には修正発表します。また、5月25日発表の3か月予報以降、夏の予報については最新の3か月予報等をご利用ください。

<参考資料（平年並の範囲）>

（１）1971～2000年のデータに基づいた6～8月地域平均の気温、降水量の平年差（比）の「平年並」の範囲は次のとおりです。

	気温平年差(℃)		降水量平年比(%)
北日本	-0.5～+0.2	日本海側	93～107
		太平洋側	91～110
東日本	-0.4～+0.3	日本海側	85～120
		太平洋側	87～110
西日本	-0.1～+0.2	日本海側	86～103
		太平洋側	89～105
沖縄・奄美	-0.2～+0.1		92～113

（２）1971～2000年のデータに基づいた6～7月（沖縄・奄美は5～6月、北日本は北海道地方を除く）地域平均の降水量の平年比の「平年並」の範囲は次のとおりです。

		降水量平年比(%)
北日本	日本海側	89～108
	太平洋側	90～106
東日本	日本海側	85～116
	太平洋側	86～107
西日本	日本海側	86～112
	太平洋側	92～104
沖縄・奄美		88～111

<参考資料（利用上の注意）>

（１）気温（降水量）等は、「低い（少ない）」「平年並」「高い（多い）」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1971～2000年の30年間に於ける各階級の出現率が等分（それぞれ33％）となるように決めてあります（気候的出現率と呼びます）。

（２）予報する確率の値は、それぞれの階級が出現する可能性の大きさを表しています。予報資料の信頼性が大きい場合には気候的出現率から大きく隔たった10％以下や60％以上の確率を付けられますが、特定の階級を強調できない場合には気候的出現率と同じかそれと同程度（30％、40％）の確率しか付けられません。

（３）晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い（少ない）場合は「平年に比べて多い（少ない）」、また平年の日数と同程度に多い（少ない）場合には「平年と同様に多い（少ない）」と表現します。なお、単に多い（少ない）と表現した場合には対象期間の2分の1より多い（少ない）ことを意味します。

全般暖候期予報解説資料

平成22年2月25日
地球環境・海洋部
気候情報課

1. 予想される夏（6月から8月）の天候

出現の可能性が最も大きい天候は以下のとおりです。

6月から7月（沖縄・奄美では5月から6月）は北日本と沖縄・奄美では平年に比べて曇りや雨の日が多いでしょう。東日本と西日本では平年と同様に曇りや雨の日が多い見込みです。その後は北日本と東日本では平年に比べて曇りや雨の日が多いでしょう。西日本と沖縄・奄美では平年と同様に晴れの日が多い見込みです。

なお、5月までの予報については、最新の3か月予報等をご覧下さい。

		気温（％）			降水量（％）			梅雨降水量（％）		
		低	並	高	少	並	多	少	並	多
北日本	日本海側	40：40：20			20：40：40			20：40：40		
	太平洋側				20：40：40			20：40：40		
東日本	日本海側	30：30：40			20：40：40			30：30：40		
	太平洋側				20：40：40			30：40：30		
西日本	日本海側	20：40：40			30：30：40			30：30：40		
	太平洋側				30：40：30			30：40：30		
沖縄・奄美		10：30：60			40：30：30			30：30：40		

		北日本 日本海側	北日本 太平洋側	東日本 日本海側	東日本 太平洋側	西日本 日本海側	西日本 太平洋側	沖縄・奄美
晴れ日数	6月	14日	12日	13日	12日	13日	13日	17日
	7月	14日	12日	15日	14日	16日	18日	24日
	8月	16日	14日	19日	19日	20日	21日	23日
降水日数	6月	9日	9日	11日	12日	12日	13日	11日
	7月	9日	10日	11日	12日	11日	11日	9日
	8月	9日	10日	9日	9日	10日	9日	11日

参考：平年の晴れ日数と降水日数（1971～2000年平年値）

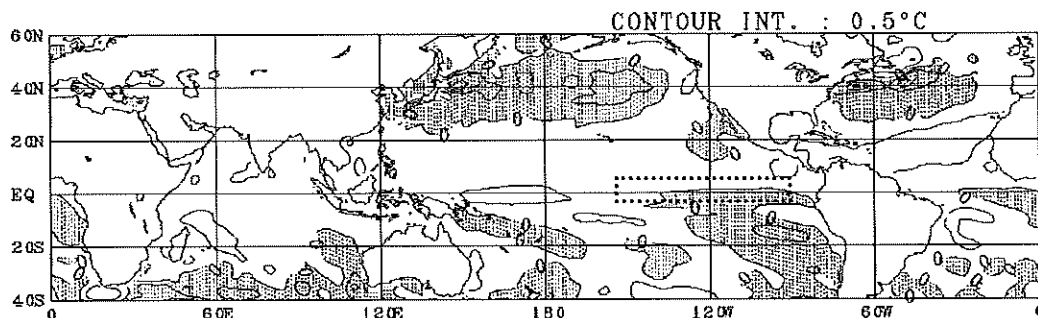
注：季節予報では「日照率40％以上の日数」を「晴れ日数」と定義しています（日照率＝1日の日照時間÷日の出から日の入りまでの時間）。また、「日降水量が1mm以上の日数」を「降水日数」と定義しています。

2. 予報の根拠

（1）数値予報（アンサンブル予報）による海洋と大気の流れの予想

①熱帯域の海洋の予想

現在エルニーニョ現象が発生しているが、数値予報の夏平均海面水温の予想（第1図）ではエルニーニョ監視海域（図中の点線）の海面水温は平年の値に近く、この夏はエルニーニョ現象は終息し、平年に近い状態になると見られる。一方インド洋熱帯域の海面水温は平年を上回ると予想されている。過去の統計でもエルニーニョ現象発生後にインド洋熱帯域では海面水温が高い傾向があるが、この夏もやや高い傾向が予想される。

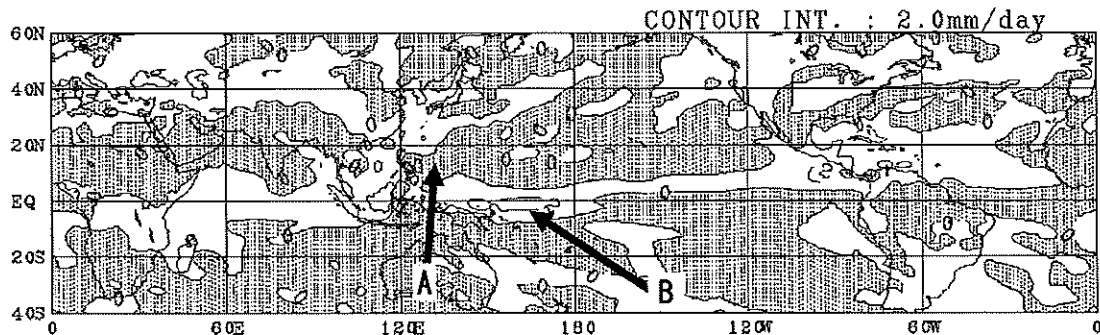


第1図 夏平均の海面水温偏差予想図

等値線間隔は0.5℃、白抜きは平年より海面水温が高く、陰影は平年より海面水温が低いことを示す

②熱帯域の対流活動（積乱雲の発達）の予想

夏にインド洋熱帯域の海面水温が高いときは、統計的にはフィリピンの東（第2図中A）で対流活動が不活発となる傾向があるが、数値予報資料でもこの領域で降水量が少ないと予想される。この領域で対流活動が不活発となると、統計的にはチベット高気圧の勢力は弱く、亜熱帯ジェットは南偏し、太平洋高気圧の本州付近への張り出しが弱い傾向がみられる。なお、赤道の日付変更線の西（第2図中B）には降水量の多い領域が予想されている。この領域で対流活動が活発な場合も、統計的には太平洋高気圧は日本の南海上では強いが、本州付近への張り出しが弱い傾向がある。

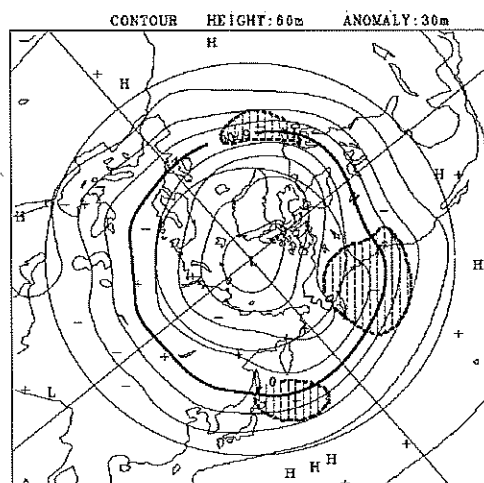


第2図 降水量偏差の予想図（予報精度を考慮すると予報に参照できる領域は熱帯域に限る）

6～8月の3か月平均。等値線間隔は1mm/day。白抜きは平年より降水量が多く、陰影は平年より降水量が少ないことを示す。

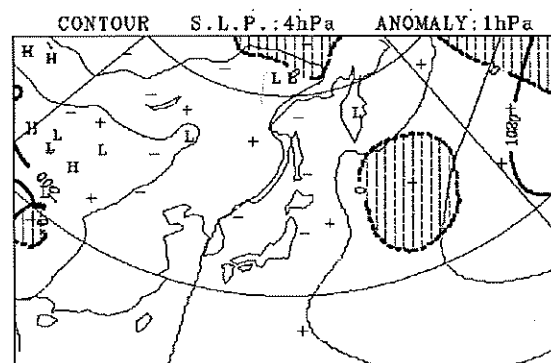
③大気の予想

エルニーニョ現象は終息へ向かうが、これまで熱帯域の海面水温が全球的に高い状態が続いたことから北半球500hPa高度（第3図）は全体的に高度が高いこと（一般的には高温に対応）が予想されている。フィリピンの東で対流活動が弱いことに対応し、日本付近では亜熱帯高気圧の北への張り出しが弱く、沖縄方面や西日本に張り出す。このため北日本の東海上は負偏差となっており、寒気の南下が示唆される。また東シベリア付近は正偏差となっているが、これはインド洋熱帯域の海面水温が高いときの統計的な特徴でもあり、オホーツク海高気圧が発生する可能性もある見込み。海面気圧の予想（第4図）でも日本の南海上では太平洋高気圧は強いが、一方で北日本の緯度帯は相対的に気圧が低い傾向が予想される。



第3図 夏の500hPa高度と偏差の予想図

等値線は高度(実線)が60m、偏差(破線)が30m毎。
陰影は負偏差で一般に寒気に対応する

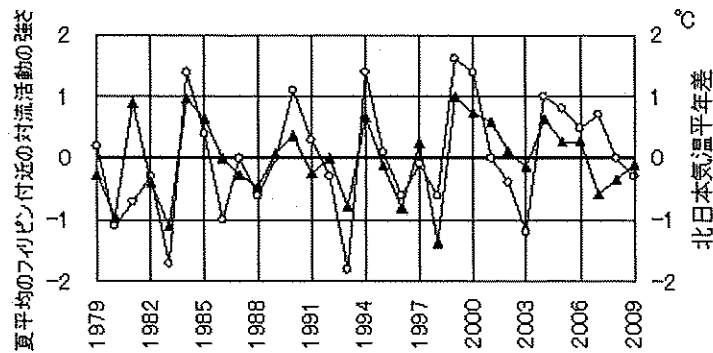


第4図 夏の海面気圧と偏差の予想図

等値線は気圧(実線)が4hPa、偏差(破線)が1hPa毎。
陰影は負偏差で平年より気圧が低いことを示す

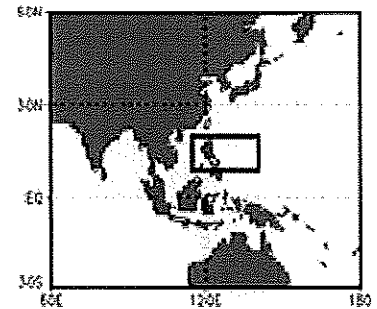
(2) フィリピン付近の対流活動

フィリピン付近の対流活動と日本付近の太平洋高気圧の強まりとは相関があり、フィリピン付近の対流活動が活発な時は、日本付近で太平洋高気圧が強まる傾向がある。フィリピン付近の対流活動の強さは北日本、東日本の夏平均気温や夏合計日照時間と正相関がある。第6図は、夏平均のフィリピン付近の対流活動の強さと北日本の夏平均気温の時系列図だが、両者とも同じような変動をしている。フィリピン付近の対流活動は熱帯域の海面水温変動と関連しており、インド洋熱帯域の海面水温が高い時にフィリピン付近の対流活動は不活発となる傾向があるが、この夏のフィリピン付近の対流活動はやや不活発と予想されている。



第5図 夏平均のフィリピン付近の対流活動の強さと北日本の気温
統計期間：1979-2009年

—▲—：夏平均のフィリピン付近の対流活動の強さ
—○—：北日本夏平均気温平年差



第6図 フィリピン付近の対流活動の強さを算出する領域

(3) 最近の夏（6～8月）の天候

第1表に最近10年の夏（6～8）の天候の特徴を示す。夏（6～8月）平均気温の階級は全国的に低温の年が少なく、沖縄・奄美は一度もなく、北日本、東日本、西日本では2003年の1回だけである。

年	夏平均気温平年差（℃）と階級				夏の 特徴
	北日本	東日本	西日本	沖縄・奄美	
2000	1.4(+)	1.0(+)	0.7(+)	-0.1(0)	高温 東・西日本少雨 太平洋高不安定 雷雨 熱帯擾乱
01	0.0(0)	1.0(+)	0.9(+)*	0.9(+)*	東日本以西高温 太平洋側少雨・多照 7・8月北日本多雨・寡照
02	-0.4(0)	0.9(+)	0.7(+)	0.2(+)	東日本以西高温 北日本多雨寡照 西日本少雨 沖縄・奄美寡照
03	-1.2(-)*	-0.6(-)	-0.3(-)	0.6(+)	北～西日本低温寡照 沖縄・奄美7～8月高温少雨
04	1.0(+)	1.3(+)*	1.2(+)*	0.1(0)	北～西高温・多照 南多雨・寡照 太平洋高強く梅雨前線不活発
05	0.8(+)	0.8(+)	0.9(+)*	0.2(+)	全国高温 西日本少雨 東日本、沖縄・奄美寡照
06	0.5(+)	0.4(+)	0.8(+)	0.4(+)	全国高温 寡照 西日本多雨 北日少雨 梅雨期に大雨
07	0.7(+)	0.4(+)	0.5(+)	0.6(+)	全国高温 国内最高気温記録更新 東・西日本入梅出梅遅
08	0.0(0)	0.5(+)	0.6(+)	0.6(+)	東日本～沖縄高温 北日・西太・沖縄少雨
09	-0.3(0)	0.1(0)	0.2(0)	0.4(+)	北～西寡照 北・西日多雨 中国・北陸・東北で出梅不明瞭

第1表 最近の夏（6～8月）の気温平年差（℃）・階級と天候
気温の階級は —：低い 0：平年並 +：高い * はかなり低い（高い）を表す。

(4) まとめ

- ① 海面水温はインド洋で平年を上回り、太平洋は赤道域の西部で平年を上回り、東部で平年を下回る。エルニーニョ現象は終息する見込み。インド洋熱帯域での海面水温は、夏の間は次第に基準値に近づく見込みだが、夏平均すると基準値をやや上回ると予想される。
- ② 熱帯域の対流活動（積乱雲の発達）は、フィリピンの東で弱く、この付近の対流活動と関連の強いチベット高気圧の勢力は弱く、亜熱帯ジェットは南偏し、太平洋高気圧の北への強まりは弱い傾向が予想される。これらはインド洋熱帯域の海面水温が高いときに統計的に現れやすい状態とおおむね一致している。
- ③ 赤道域の日付変更線の西には明瞭な対流活動活発域が見られるが、統計的にはこの付近の対流活動が活発なときは、その北側の日本の南海上では太平洋高気圧が強いものの、本州付近への張り出しは弱い傾向がある。

以上のことから、夏は平均的にはチベット高気圧の勢力は弱く、亜熱帯ジェットは南偏傾向で、太平洋高気圧は西への張り出しは強いが、本州付近への張り出しは弱い。オホーツク海高気圧が発生する可能性もあり、日本付近では北冷西暑の傾向が予想される。

※ なお3月25日と4月22日発表の3か月予報に合わせて予報内容を再検討し、変更がある場合には修正発表する。